平成二十八年度　小学生・中学生　秋の俳句大会

平成28年11月1日から27日まで開催した「小学生・中学生 秋の俳句大会」は、投句数にして759句のご応募をいただきました。たくさんの方々のご参加、誠にありがとうございました。

審査会を行った結果、最優秀作品 小学生の部二句、中学生の部二句、入選作品 小学生の部五句、中学生の部五句を次のとおりに決定いたしました。

（賞・部門ごとに学年順・五十音順）

◆審査会委員

井澤　昭雄（四日市中日文化センター講師、ともしび詩舎同人）
野村　弘和（公益財団法人徳川黎明会 徳川美術館 管理部 マネージャー）
鳥居　和之（名古屋市蓬左文庫 文庫長）
岩田　正雄（公益財団法人名古屋市みどりの協会・岩間造園グループ 徳川園事務所 所長）

《最優秀作品・小学生の部》

名古屋市立　葵小学校（東区）四年　吉次　なほの　さん

三まいの　軍手重ねて　くりひろい

イガの付いた栗を見ることが珍しい昨今ですが、大高緑地などに行けば、名古屋市内でも実をつけた栗の木に出会うことができます。鋭いイガのトゲに飛び上がるほど痛い思いをしたか、あるいは周りにおどされて自衛本能が働いたからでしょうか、軍手三枚重ねると指の動きが悪くなるけれど、それでも痛いよりはマシだとばかり、おっかなびっくりクリを拾うユーモラスな姿が思い浮かぶ良い句だと思います。

【審査員　鳥居　和之】

《最優秀作品・小学生の部》

名古屋市立　明倫小学校（東区）六年　小澤　秀周　さん

紅葉散る　木々の中に　我一人

友達か或いは家族と連れ立って紅葉見物に出かけたのでしょうか。語らいながら、赤や黄のもみぢの小路を行くうちに、いつのまにかはなればなれに、ふと気がつけば一人になっていた。散りかかるもみぢ葉、小鳥の声、空は青く白い雲が流れゆく秋たけなわの大自然の中にひとりたたずむ静かなひととき、その瞬間をとらえて俳句にされました。情景が瞼に浮かびます。

【審査員　井澤　昭雄】

《最優秀作品・中学生の部》

名古屋市立　冨士中学校（東区）一年　織田　かんな　さん

あきのやま　いろそめてから　ふゆをまつ

この時期、あきのやまの木々には一葉ごとに紅葉が始まり緑・赤・黄色など一日ごとに色の染まりが変化し絵画のようです。厳しい冬の寒さの訪れる前に1年の中で最も華やかに演出しているあきのやまの情景を歌われたと思います。わかりやすい表現で四季の移り変りも伝わりやさしさを感じます。

【審査員　岩田　正雄】

《最優秀作品・中学生の部》

東海学園　東海中学校（東区）一年　藤田　剛大　さん

黄金の穂　今年の成果　背負いにけり

秋の空の下、どこまでも広がる黄金色の稲の海。重く垂れ下がった稲の穂は、まるで農家の人々の1年間の苦労の成果を背負っているように、堂々と誇らしげです。「しょいにけり」というリズミカルな下の句が力強く句全体を引き締めています。力感と遠近感に溢れた秀作です。

【審査員　野村　弘和】

《入選作品・小学生の部》

名古屋市立　矢田小学校（東区）一年　杉本　泰良　さん

どんぐりは　ぐるぐるまわり　ぐるぐるる

名古屋市立　砂田橋小学校（東区）二年　伊東　新之助　さん

もみじ赤　いちょうの黄色　そらの青

《入選作品・小学生の部》

名古屋市立　東桜小学校（東区）二年　江村（えむら）　怜子（れいこ）　さん

もみじがね　また来年と　手をふるよ

名古屋市立　東桜小学校（東区）二年　戸谷（とだに）　帆那（はんな）　さん

もみじのは　ぐんぐんのびて　くもつかむ

名古屋市立　明倫小学校（東区）三年　中（なか）　琳音（りおん）　さん

もみじみて　おまけにたべる　ごへいもち

《入選作品・中学生の部》

東海学園　東海中学校（東区）一年　太田（おおた）　隼人（はやと）　さん

通学路　イチョウ舞う道　息止める

《入選作品・中学生の部》

東海学園　東海中学校（東区）一年　奥野（おくの）　良明（よしあき）　さん

秋の空　裂いてそびえる　五重塔

東海学園　東海中学校（東区）一年　森（もり）　奏互（そうご）　さん

赤い羽根　また一つふえ　胸を張る

東海学園　東海中学校（東区）一年　山口（やまぐち）　悠地（ゆうち）　さん

曽祖父の　墓のかつらは　カラフルだ

名古屋市立　矢田中学校（東区）二年　入江（いりえ）　七海（ななみ）　さん

秋の暮　寂しさ混じり　踏む木の葉